

ご

じゅう

せ

郷中施物語



今からおよそ 200年前の  
ある村でのお話。  
別に裕福でもなく 貧しくもない  
おだやかな暮らしがあったのさ。





そんなある日、おだやかなくらしが一変し、  
地震でわらぶき小屋は壊れた。  
津波が村を地獄へつき落とした。

人々はおどろき、さわぎ ある人は夫を助けに海へ走り、  
またある人は 山の上の寺めがけて走った。

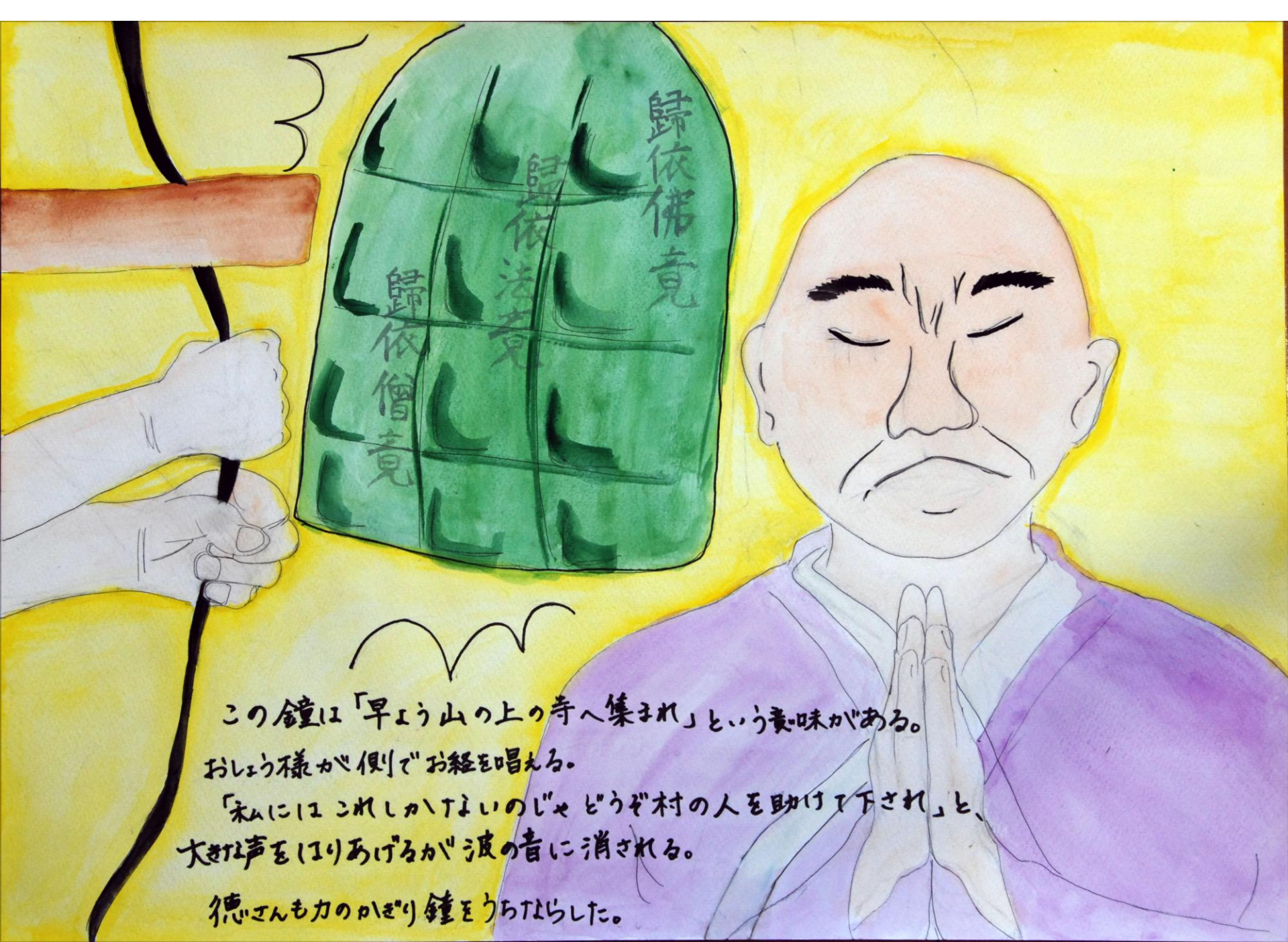




山の上にある寺に 皆は かけあがる  
寺守りの 徳さんと おしろう様が 鐘つき堂に のびり 早や鐘をつき  
村のみんなに知らせた。「ゴンゴンゴンゴン」







この鐘は「早よう山の上の寺へ集まれ」という意味がある。  
おしょう様が側でお経を唱える。  
「私にはこれしかたよいのじゃどうぞ村の人を助けて下され」と、  
大きな声をほりあげるが波の音に消される。  
徳さんもカのカざり鐘をうちならした。





ある女の人が 赤ん坊を  
おしょう様にあずけた。

泣き叫ぶ 赤ん坊を抱きかかえ  
おしょう様が 本堂へ走る。





おしょう様が階段を駆けあがると  
下から女の人々が叫ぶ、  
「おしょう様、助けて下さい、  
その子をたのみます。」  
これだけ言うと  
その場にたおれこみ  
波にさらわれてしまった。



「だれか乳の出る人はおらんかのう」  
胸は打けて寝るせの人 ひとりひとりのぞき込み。

あちこちで泣き声がするかい

誰ひとり答えてくれる人はおらん。

一人ふくエかいた人を見つけて声かけたかい

首を横に振るだけや。た。





「だれか乳の出る人はおらんかのう」  
 胸はだけて寝る女の人 一人一人にのぞきこみ  
 あっちこっちで泣き声かするが  
 誰ひり答えてくれる人はおらん  
 一人ふくよかてお人を見つけて声かけたが  
 首を横にふるだけや。た  
 髪ふりみだし やせぎみの人か  
 赤ん坊に乳をふくませてる

「こっち こっち おしえう様」  
 「その人は まんだ嫁入り前

赤ん坊を受けとると  
 もり片方の乳を  
 ふくませる。

一度に泣きやみ

本堂の中は皆、  
 ほっと一見ついた。



「じゃ。乳は出んの」



二人の子を抱きかかえ  
 乳をふくませる。  
 その人はまるで仏のように  
 輝いていた。  
 母とも分からぬが 無心に  
 お乳にすがりつく赤子  
 やせたり本に何と力強いこと



あたにかいふんいきが つつみこんだの？ある。  
髪ぶりみだし着物の裾ははたけているが 気にするとはくましもぶくませている。  
そのうち赤ん坊のほほが うすらと赤みをおびるとすやすやねむり始めた。  
そと寝かいつけると、あわて裾をかけた。  
その時老母がどこからか 着物を一枚  
その足にかけたのである。  
「ありがと」といって、その着物を赤ん坊に  
そとかけた。するとあちこちから  
着物を出してきた。  
皆ほほえみはがら。





このまんまにしたら 村の人は  
うえ死にしてしまう。

厘の米や麦、塩にみそ、  
全部入れておどろすいにしよ。

「料理のできる人は助けて下すわ  
い」と、皆立ちあがり、  
庭に出て用意をした。

村中をのみこんだご海は  
静かだったが、すべてを海に流した  
村には、残が「いのみか」

山積みやったが、  
とにかくとにかく 腹ごしらえに  
精を出すことにした。





湯気が立ちのぼり、おぞろしいのうまろけな  
においがあたり一面に立ちこめる。

「あの乳のみ子をめんどろみとる女に余分に  
わたくし」とか、

「山月がねむりにけて  
にも一杯や、てくれよ」

「いすけどんのばあ  
よう、焼いたやわら  
とか、こんな時だから  
こそ、気使いがあつたよ」

いる旅の人  
とか、  
さまには  
かめを入れたわ、

「こんなつらい事は——」

「なんでこんな事は——」

「よそでも同じかな——」

「これからどうしたら  
いいのかな——」

とか話しながら  
ぞろぞろをすすり進む。





おしょう様が皆を集めて話し始めた。

「なあ皆の衆、こんなつらい事はないが」

これをどうするか相談したいのじや。」

「おしょう様わら何ぞ悪い事でも  
したんかいのう。コレという事が思いつかんのだ。」

「そうじゃ そうじゃ。」

ある者はうでぐみをし、又ある者は  
にぎりこぶしをぶるぶるとぶるわせたかき  
名案はなかつか出んのやった。





「私はもう何としても主人の霊をとむらいたいのです。」  
と口びを切った。

「つらい事よのう」といる人に呼びかける。

おじいちゃんを片手におしえり様が立ちあがると、  
おすぐに海をみつめ、「海に流れた者も残った者も  
共につらく悲しいことではあるが、残った者も

ぐちを言うひまとてなく、これから生きて行かなくては  
ならんのだよ。そこで、五月十五日を命日とし、  
海に流れた人の安らかにおねおり下さいと、いりごとで”  
海の神様、龍神様の御加護をお願いし、  
おまつりする事をしたらどうじやろう。」という。



「それはありがたい事です。」

「まっとう海の底で夫もいりこんでくわることでしょう。」



「ところで海に流されてしもうて私の所には捧げる物は  
何も無いのです。」と泣きくすねた。  
畑にある物はなんでも良い集めて下さね、と  
おしえう様がいう。

すると留さんが「今朝、始めて取れたきゅうりや、  
ちえと曲がってるが役に立たんか。」  
と言いつながら、かごにいっぱい入れきた。

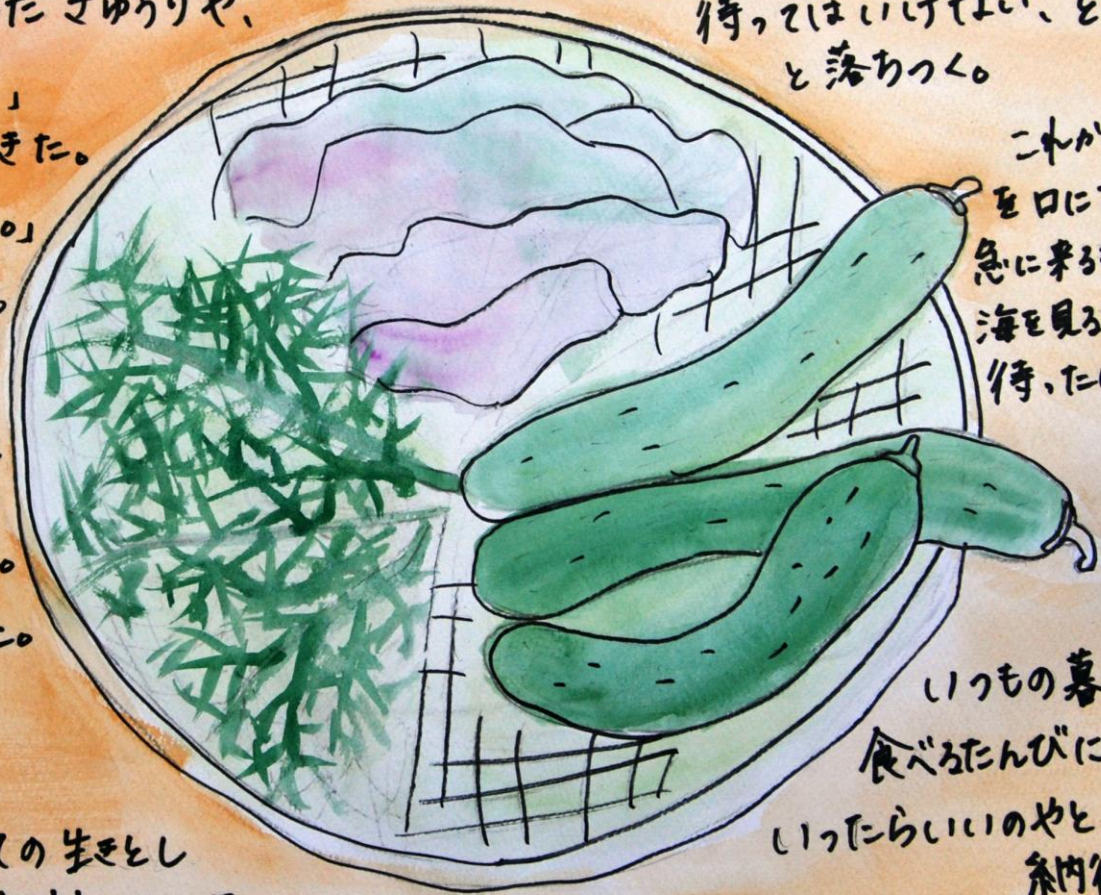
「裏の畑で小松菜が出てきましたんで」  
と、久やんのほころいずは顔があった。

「今朝の浜は静かだミルナが」  
浜に打ちあげられまてたよ」と  
倉じいあせんがかごに入れこがって  
きた。

緑の中にうすピンクが 手びれかった。  
おしえうさまが

「そうじゃ、二本をすべて舟にのせ  
伊勢の海へ流そう。そしてすべての生きとし  
生きた命のすべての霊をとむらおう。この日の  
この悲しみを忘れぬようにな。われらの教訓にもしえう。」

きゅうりは といふと 誰かがさげば。  
津波は急に来るぞ」といふのは どうやら。  
ミルナは、津波が来たら海を見るよや。  
こわいから足が動かかんようになるもの、といふ  
小松菜は、津波が来るか来るかと  
待ってはいけてよい、としえう。  
と落ちつく。



二本から、きゅうり  
を口にすたんびに  
急に来るぞが、ミルナは  
海を見るよが、小松菜は  
待、たらあかんか。

いつもの暮らしの中で  
食べるたんびに話をして  
いったらいいのやと、皆で  
糸内得した。

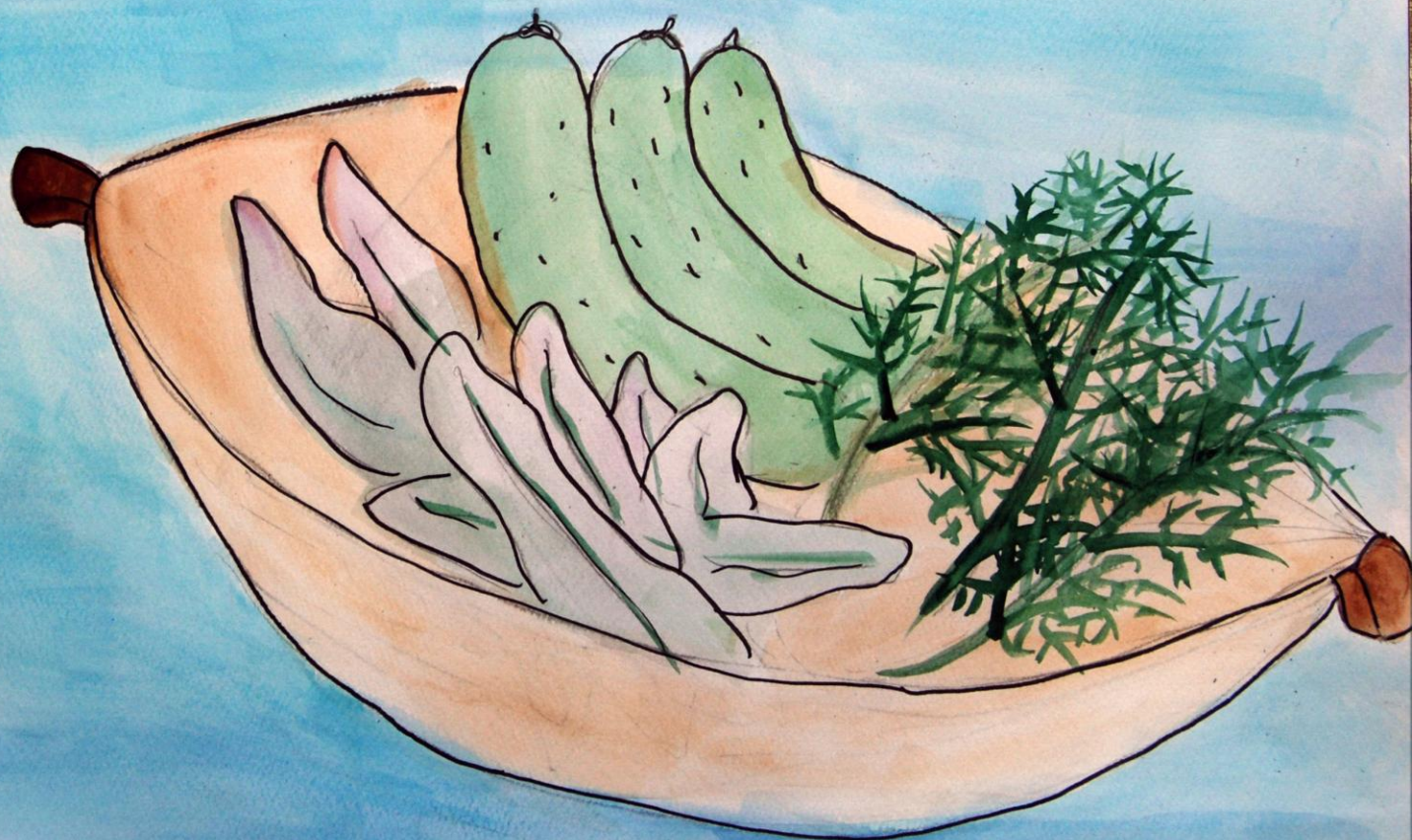


舟にのせると、海辺に出で舟にのせ

流すこととする。

終るとだれ言いとなく

寺に集まった。





この大災害、皆で助けあい、ここまで来ました。

皆のぬくもりある優しい心に痛み入りました。

これから、この日のこの事を後々の世まで正しく伝えるために、

郷中庵という名のもとに集まり、一つのなべのごちそうを分けながら

苦勞話に花を咲かせたり、次の畑の投どりや木村の話をする場に

しましゅうやということで、二百二十年もの間村の中でこの行事を  
続けているという。

この行事を何かの形で発進したいものと

空想に空想を重ねてきたためました。





私達の往む鈴鹿市白子町に、伊勢型紙資料館があり、その中に地震小屋がありました。

壁は和紙が張っており、天井も和紙で出来ていました。

屋根は、桧皮でおおい竹組みがしてありました。

土台は、丸い石が並べてあり、その上に家が建っていました。

土台の木がすべて10cm位外へ出してあり地震が来た時、グラグラとするが、その範囲内で元にもどり、壊れないような建物になっています。

中には地元の特産である、伊勢型紙が入れてあり大切な物を保存出来るようにしてある

との事でした。

ここにも、地震に対する昔の人の知恵があると、勉強出来ました。

丸石



土台

10cmくらい  
出ている



おわり

NPO 法人災害ボランティアネットワーク鈴鹿

後藤優花  
南部智郁